

つい半世紀前まで、科学技術は、単に生活を便利にする、人間存在とは無関係な存在として扱われる傾向にあった。しかし、今やテクノロジ―は我々の生命やコミュニケーションや対人関係のいちばん根底的なところにまで食い込み、マシンは人間にとって本質的なものになっている。

例えば、医療技術の進展は生命倫理観を一変させた。脳が死んでいるのに、身体（心臓）が動いている。こんなことは、五十年前以前の生命の定義では、あり得なかった。ところが、テクノロジ―は、人間の身体を機械で上げ替えるという可能性をもひらきつつある。また、ペット型ロボットの登場は、対人関係をも侵食しようとしている。

こうした状況に関して、「テクノロジ―は人間らしさを喪失させる。」という批判がある。例えば、携帯電話を批判して、顔と顔を突き合わせて直接しゃべるのが、人間本来のコミュニケーションの姿だという。しかし、このような批判は、素朴すぎる。

人は、生まれ育った環境こそが自然であり、成人したのちに出てきた新たなテクノロジ―に違和感を抱く存在。例えば、新幹線は、東京・大阪間を八時間から三時間の距離に縮めた。これに対して、速すぎてだめだよ、旅というのはのんびりするものだよ、という批判が起こる。ところが、江戸時代の人は、東京と大阪は、十五日かけて歩くのがまっとうな距離だと主張することだろう。子どもがナイフを使えないという議論があったが、火打ち石を使えない現代人に対し、昔の人は、人間の本来の能力の欠如だと嘆くかもしれない。

我々はテクノロジ―に関して、最初は言い知れぬ衝撃を覚え拒否するが、時間が過ぎると、それがあたたかも太古の昔からあったかのごとくに、使いこなし受け入れていく。それが、人間の人間たるゆえんだ。

人類誕生から七百万年。農耕時代から数えて一万年でもいいが、電気、水道、ガスの生活があたりまえになったのは僅か百年前。テクノロジ―に対する違和感と社会に定着する様子というのは、いつもダイナミズムの中で動いている。自分の反発する感情が一時的なものなのか、根本的なところを突いているのかはなかなか判断しにくい。

農業は、あたかも人類にとって本質的なもののように思われるが、種やくわやスコップといった存在もテクノロジ―の所産。今更、テクノロジ―は人間の本性に反していると言っても、一万年遅い。

テクノロジ―が人間を幸せにするかどうかは、否定も肯定もできないが、私たちが「本来」と思っているような姿自身が、非常に人工的に作られてきた産物ではないことが多い。

他方、テクノロジ―は、自己展開している。つまり、人間が必要に応じてテクノロジ―を使いこなすというより、それは人間の思わくを超えて、独立した生き物のように独自に成長、発展する。人間は、徹底的にテクノロジ―に巻き込まれている存在であり、テクノロジ―によって変容する存在だということとを自覚することで、マシンと冷静に対処できる。

テクノロジ―と人間。後者が前者を生み出したにもかかわらず、前者は後者を根本的な次元で規定し変容させる。この興味深い相互作用を捉えることこそ、今日、「人間らしさ」について考えるための重要な手がかりとなるだろう。